様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　５ 日現在

機関番号：１２２０１
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ１２４１０

研究課題名（和文）英語のswiping構文に対する総合的理解へ向けての通時的及び共時的研究

研究課題名（英文）A Diachronic and Synchronic Study of Swiping in English for Its Comprehensive Understanding

研究代表者
岩崎　宏之（IWASAKI, Hiroyuki）

宇都宮大学・共同教育学部・助教

研究者番号：５０８１６０５６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、英語のswiping構文に対して総合的な理解を得ることを目標として、当該構文に関する通時的研究と共時的研究の両方を実施するものである。通時的研究に関しては、英語のswiping構文が初めて出現したのが後期近代英語期であることを明らかにした。共時的研究については、英語のswiping構文の先行研究の中で最近になって観察されたSwiping without Sluicingを取り上げ、当該構文が「非文法的であるにもかかわらず容認可能である」というステータスを持っていることを論証し、それ以前までに研究されてきたスルーシングを伴うswipingとは区別されるべきことを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまでに英語のswiping構文の通時的研究が本格的になされたことがなく、当該構文の英語史上における出現時期の同定を含め、先行研究が専ら共時的観点から考察を深めてきたところに新たな知見を積み重ねることができる。また、Swiping without Sluicingは観察自体がごく最近で研究がほとんど存在していない状況であるため、この現象について更に調査を行い分析を提案することは、swiping構文の研究に対して一定の貢献を果たすことになる。

研究成果の概要（英文）：This research project is an attempt at gaining a comprehensive understanding of swiping in the English language through both the synchronic and diachronic study of the construction. The diachronic study reveals that swiping began to be used in late Modern English. The synchronic study takes Swiping without Sluicing as an object of inquiry and identifies its status as an ungrammatical but acceptable construction. This leads to the conclusion that Swiping without Sluicing has to be distinguished from swiping involving sluicing.

研究分野：理論言語学、英語学

キーワード：swiping構文　Swiping without Sluicing　等位接続　英語史　現代英語　生成文法理論

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

swiping 構文 (**s**luiced ***w****h*-word **i**nversion with **p**repositions **i**n **N**orthern **G**ermanic (Merchant (2002)) とは、英語でいえば *Lois was talking, but I don't know who to ~~Lois was talking~~.*がその例となり、スルーシング (sluicing) が関与することが見て取れる。swiping 構文の持つ特異な性質として、省略節内の疑問詞 *who* が直後の前置詞 *to* の目的語に相当することから、英語において一般的に見られる語順とは逆になっていることが挙げられる。swiping 構文を分析するに当たっては、この特異な語順を導き出すために、どのような統語派生を提案するかが大きな論点となる。先行研究における提案を分類すると、随伴 (pied-piping) を伴うと仮定する分析(Merchant (2002)) と前置詞残留 (P-stranding) を伴うと仮定する分析 (Hasegawa (2006), Murphy (2016), Nakao (2007), Radford and Iwasaki (2015), Sugisaki (2007), van Craenenbroeck (2004, 2010)) の 2 つに大きく分けられる。このような研究の流れの中で、Tyler (2017) によってスルーシングの適用がない swiping 構文の例が観察された (Swiping without Sluicing : *Speed is defined to be distance divided by time; when and who by was this definition first put forward?*)。興味深いことに、この種の swiping 構文には疑問詞の等位接続が伴っていなければならない。また、現代英語に swiping 構文が存在するということは、英語の歴史変遷上どこかの時点において出現したことになるわけであるが、古い時代の英語の swiping 構文に言及した数少ない論文である Radford and Iwasaki (2015) においてコーパス調査の結果が報告されてはいるものの、いつ出現したのかという問題は未解決のまま残されている。

２．研究の目的

まずは、「英語の歴史の中で現代英語の swiping 構文が現れるようになったのはいつか」という問いに答えるために、現代英語の swiping 構文に関する通時的研究を行う。上述したように、swiping 構文の先行研究は随伴分析と前置詞残留分析に大別されるが、当該構文を通時的な観点から眺めることにより、2 つの分析のうちのどちらが妥当なのか、あるいは、また別のアプローチが必要になるのかという論点に対して一定の示唆がもたらされることが期待される。加えて、Tyler (2017) によって観察された Swiping without Sluicing を考察し、この種の swiping 構文には疑問詞の等位接続が伴わなければならない理由を解き明かすことを通じて、この構文の本質に迫っていく。そして、この知見に基づきながら、スルーシングを伴う swiping 構文と伴わない swiping 構文 (=Swiping without Sluicing) との関係性を明らかにする。

３．研究の方法

史的電子コーパスを使って事例を収集し、古い時代の英語の swiping 構文に関して調査を行う。Radford and Iwasaki (2015) の研究により、古英語・中英語・初期近代英語の頃には現代英語の swiping 構文はまだ確立していなかったことが既に明らかとなっているため、現代英語の swiping 構文が出現した時期を同定するのに当たっては、後期近代英語のテキストを収録した The Penn Parsed Corpus of Modern British English, second edition (Kroch et al. 2016) を用いるのが有益となる。現代英語についても、電子コーパスや英語母語話者へのインタビューを通じてデータを収集する。このような形で収集されたデータから観察命題を抽出し、その命題に対して生成文法理論に即した分析を施すことによって、swiping 構文周辺の英文法に関する理論的理解を深める。

４．研究成果

(1) 通時的研究

初期近代英語のテキストを収録した The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English (Kroch et al. (2004)) と後期近代英語のテキストを収録した The Penn Parsed Corpus of Modern British English, second edition (Kroch et al. (2016)) という 2 つのコーパスを調査し、swiping 構文の実例を収集した。前者のコーパスでは swiping 構文の例を見つけることができず、Radford and Iwasaki (2015) の主張するように、初期近代英語期は swiping 構文が未発達の段階であったことが改めて確認された。一方、後者のコーパスには swiping 構文の実例が 5 つ存在していた (5 例の出現年はそれぞれ 1739 年、1827 年、1840 年、1879 年、1911 年)。このコーパス調査の結果から、英語で swiping 構文が可能になったのは後期近代英語期であることが判明した。Yáñez-Bouza (2015) は近代英語期の前置詞残留について、18 世紀後半から使用頻度が著しく低下し、19 世紀になって前置詞残留の使用が徐々に増加するも、その速度はゆっくりであったと述べている。英語で前置詞残留があまり生産的でなかった時期に swiping 構文が使われ始めたことから、swiping 構文と前置詞残留との間に直接的な関係を持たせるのには慎重を期す必要がある。しかし、2022 年度に研究代表者が実施した初期近代英語期の関係節内の前置詞残留に関する研究により、Radford and Iwasaki (2015) も英語の swiping 構文に関する議論の中で言及していた *where* 複合語が当該前置詞残留の生産性向上に寄与していることが示され、英語の swiping 構文と前置詞残留が何らかの形で結び付いている可能性も出てきた (この研究成果については、研究期間後の 2023

年度に『近代英語研究』第 39 号にて論文として公開される)。この関係性の有無は、swiping 構文の先行研究で広く支持されている前置詞残留分析の妥当性に関わる重要な論点であり、今後の更なる研究が俟たれる。

(2) 共時的研究

Tyler (2017) によって観察がなされた Swiping without Sluicing に対して、生成文法理論に即す形で統語的分析を行った。より具体的には、conjoined *wh*-questions の削除分析と Nakao (2009) の提案する swiping 構文の統語派生とが組み合わさるようにして Swiping without Sluicing の派生が展開すると提案し、結局のところ Swiping without Sluicing は統語的に派生され得ないと論じた。この結果は、英語母語話者が Swiping without Sluicing を実際に使用するという事実と矛盾するようであるが、この「非文法的であるにもかかわらず容認可能である」というステータスは等位接続によってもたらされている。等位接続を伴う文においては、文法的には許容されない形式が生起する場合がある (*She and him will drive to the movies.*)。Swiping without Sluicing にとって等位接続は、本来は文法的に許されないにもかかわらず容認可能な構文として使用に供させる役割を担っており、「Swiping without Sluicing に等位接続が関与するのはなぜか」という問いに対して理に適った解が得られたことになる。この分析の帰結として、言語能力 (competence) のレベルで認可されるスルーシングの適用された swiping 構文と言語運用 (performance) のレベルで認可される Swiping without Sluicing は、別の言語現象として区別されるべきであることが導出される。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 岩﨑宏之	４．巻 -
２．論文標題 中英語期・初期近代英語期における補文標識thatの文法化に関する一考察―That痕跡効果の欠如・出現の観点から―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本英文学会第93回大会Proceedings	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Hiroyuki Iwasaki	４．巻 4
２．論文標題 Swiping without Sluicing: A Kind of Swiping?	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Data Science in Collaboration	６．最初と最後の頁 32-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 岩﨑宏之	４．巻 50
２．論文標題 英語のswiping構文の通時発達：前置詞残留分析の妥当性をめぐって	５．発行年 2019年
３．雑誌名 東邦大学教養紀要	６．最初と最後の頁 59-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 岩﨑宏之
２．発表標題 中英語期・初期近代英語期における補文標識thatの文法化に関する一考察―That痕跡効果の欠如・出現の観点から―
３．学会等名 日本英文学会第93回大会 シンポジアム 「英語の構造変化における機能範疇の果たす役割」
４．発表年 2021年

１．発表者名 岩﨑宏之
２．発表標題 英語学の視点から大学英語教育を再考する
３．学会等名 日本英語文化学会第149回例会 ワークショップ 「大学英語教育が語学を超えるとき」
４．発表年 2022年

１．発表者名 Hiroyuki Iwasaki
２．発表標題 Swiping without Sluicing: A Kind of Swiping?
３．学会等名 Tsukuba Global Science Week 2020: Linguistics and Data Science in Collaboration（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Hiroyuki Iwasaki
２．発表標題 When Did the Complementizer-trace Effect Appear in the History of English?
３．学会等名 Tsukuba Global Science Week 2018: Data Science in Collaboration on Language (DASIC)（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

researchmap https://researchmap.jp/hiroyuki.iwasaki 東邦大学 教育・研究業績データベース https://gyoseki.toho-u.ac.jp/thuhp/KgApp?kyoinId=ymbogksgggy

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関